

タビュラー・スクレイパーの展開とウルク文化の拡大

安倍雅史

Tabular Scrapers and the Uruk Expansion

Masashi ABE

紀元前4千年紀半ばから後半にかけて、南レヴァント地方を中心に製作されてきたタビュラー・スクレイパーが、南メソポタミアを起源とする北シリアのウルク文化の集落に導入されるようになる。石器の分布、出現期の様相を中心に考察した結果、タビュラー・スクレイパーは、家畜飼育特に羊毛刈りに用いられたと推測された。ウルク文化の社会が大量にタビュラー・スクレイパーを導入するようになった背景には、社会の複雑化を支えるため羊毛製品の重要性が徐々に増し、効率の良い毛刈り具が求められたことが考えられる。

キーワード：タビュラー・スクレイパー、遊牧民、毛刈り、羊毛、ウルク文化の拡大

Uruk settlements, especially those in north Syria, introduced tabular scrapers from the Southern Levant in the late 4th millennium B.C. The present study suggests that tabular scrapers were used for stock breeding, especially as shearing tools. It is further suggested that the Uruk settlements needed a large amount of tabular scrapers as wool shearing tools to make their products, in order to maintain the trade-oriented economy.

Key-words : Tabular scrapers, pastoral nomads, shearing, wool, Uruk expansion

問題の背景

タビュラー・スクレイパー (Tabular scraper) は、背面の大部分にきわめて平坦な原礫面を意図的に残した大型のスクレイパーのことを言う(図1)。この特徴的な石器の存在は、既に1930年代には知られていたが、総合的な研究は、80年代に入るまで実施されることはなかった。はじめて総合的な研究を実施したS.A.ローゼンは、この石器の製作遺跡が、ネゲブ沙漠とシナイ半島でのみ知られているため、南レヴァント地方の乾燥地域で専門的に製作されたタビュラー・スクレイパーが、同地方の農村や都市が栄えた湿潤な地域へと搬出されていたと主張した(Rosen 1983; 1997)。その後、ジャフル盆地やジラートといったヨルダンの沙漠内で、相次いでこの石器の製作遺跡が発見されている(藤井 1998, 1999, 2000; Baird 2001; Quientero and Wilke 1998)が、南レヴァント地方の乾燥地域以外からは、いまだこの石器の製作の痕跡は一切確認されていない。この石器は、南レヴァント地方、特にその乾燥地域を中心に土器新石器時代後半から前期青銅器時代にかけて展開してきたものと思われる。

この石器は、元来、南レヴァント地方を中心に分布していたが、紀元前4千年紀半ばから後半になると、エジプトやトルコ、イラク、イランといった遠隔地からも多く出土するようになる。特に、ウルク文化と関連する遺跡から、

この石器が出土する傾向がある。南メソポタミアで急速く都市化を遂げたウルク文化は、紀元前4千年紀半ばから後半にかけて、周辺のシリア、トルコ、イラン地域に拡大する。この現象は、「ウルク文化の拡大」の名称で知られている。G.アルガゼは、先進的だが資源に恵まれていない南メソポタミア地域の集団が、資源獲得のために、社会経済的には未発達だが豊富な資源に恵まれている周辺地域に進出を望み、植民地を建設し、交易の重要な地点に包領地などを建設した結果、「ウルク文化の拡大」が起こったと説明している(Algaze 1989, 1993)。

このウルク文化と関連する遺跡から、タビュラー・スクレイパーが頻繁に出土している(図1、2)。現在のところ、ハブーバ・カビーラ南(Habuba Kabira Süd)、ジェベル・アルーダ(Jebel Aruda)、シェイク・ハッサン(Sheikh Hassan)、エル・コウム2(el Kowm 2)、ハセック・ホユック(Hassek Höyük)、ジュデイダ(Judaidah)、ハジュネビ(Hacinebi)、ウンム・クセイール(Umm Qseir)、カシュカショク2号丘(Kashkashok II)、チョガ・ミシュ(Choga Mish)などから出土例が報告されている(Alizadeh 1996; Cauvin and Stordeur 1985; Edens 1999; Hanbury-Tenison 1983; Hole and Johnson 1986-87; Nishiaki 1991; Crowfoot-Payne 1960; Schmidt 1984)。ウルク文化の集団が、交通の要所に建設したとされる20haにも及ぶハ

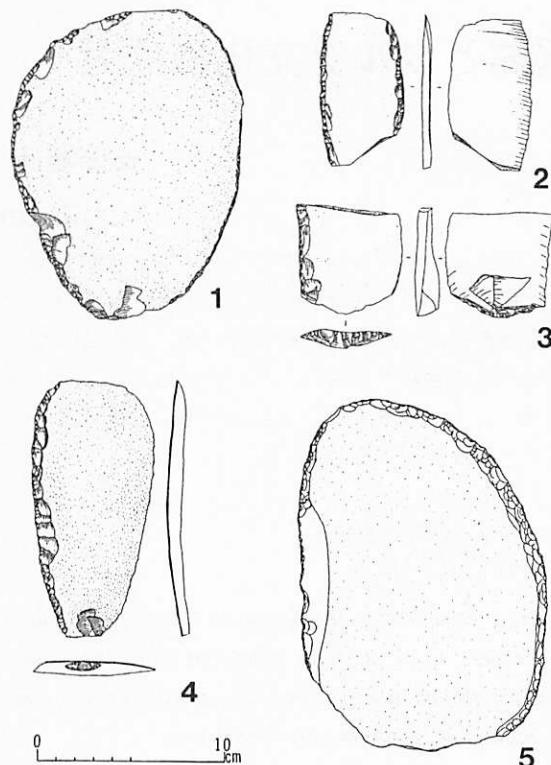


図1 タビュラー・スクレイパー

- 1 シエイク・アワド (南レヴァント) (Schmidt 1984)
- 2, 3 ウンム・ハマド (南レヴァント) (Betts 1992)
- 4 ハブーバ・カビーラ南 (ウルク文化) (Schmidt 1984)
- 5 ジェベル・アルーダ (ウルク文化) (Hanbury-Tenson 1983)

ハブーバ・カビーラ南やその近郊のジェベル・アルーダといった大規模な都市遺跡からも、またウンム・クセイールといった小規模な遺跡からもタビュラー・スクレイパーが出土している。遺跡の大小、機能を問わず、ウルク文化と関連する多様な遺跡からこの石器が出土することは、南レヴァント起源のタビュラー・スクレイパーが、南メソポタミア起源のウルク文化の物質文化内にいかに根強く導入されていたかを示している。この点さらに興味深い事例が、ハジュネビ遺跡から報告されている。ハジュネビは、発掘者によって、交易のため南メソポタミアからアナトリアへ赴いたウルク文化に属する集団と在来の集団という異なる二集団が、向かい合わせに同一テル内に居住していたと解釈されている遺跡である (Stein 1999)。ここでは、レヴァント起源のタビュラー・スクレイパーがウルク文化側の居住区からのみ出土することが知られている (Edens 1999)。

南メソポタミアのウルク文化の遺跡自身からは、この石器の出土例は知られていない。しかし、近隣のチョガ・ミシュから、タビュラー・スクレイパーが出土していること、

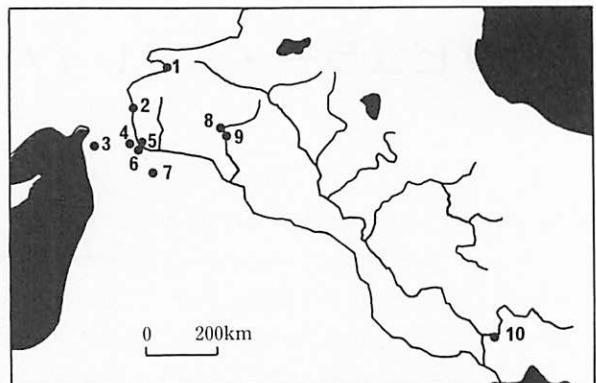


図2 タビュラー・スクレイパーが出土したウルク文化関連遺跡

- 1 ハセック・ホユック
- 2 ハジュネビ
- 3 ジュディダ
- 4 ジェベル・アルーダ
- 5 シエイク・ハッサン
- 6 ハブーバ・カビーラ
- 7 エル・コウム2
- 8 カシュカショク
- 2号丘
- 9 ウンム・クセイール
- 10 チョガ・ミシュ

さらに発掘例が北シリアに比べて少なく、発掘自体も古く石器の記述がなされていないことを考え合わせると、今後、調査が再開されれば十分にこの石器が出土することが考えられる。しかし、現段階では、ウルク文化の進出先である北シリアを中心に、この石器が多く出土する傾向が高いと考えるのが賢明であろう。

このように南メソポタミアを起源とするウルク文化は、周辺地域へと拡大する過程において南レヴァント起源のタビュラー・スクレイパーを自らの物質文化内に導入するようになっていた。上述したように、タビュラー・スクレイパーの製作址は、南レヴァント地方の乾燥地域内でしか確認されていない。さらに近年、ヨルダンの沙漠内で相次いでこの石器の製作址が発見され、タビュラー・スクレイパーの一大産地としての様相を呈しあげている。一方、ウルク文化に関連する遺跡からは、石核やチップといったタビュラー・スクレイパーの製作を示唆する痕跡は確認されていない。また、この石器には、明らかに他の石器に用いられる石材とは異なる良質の石材が用いられていると報告されている (Edens 1999; Nishiaki 1991; Hole and Johnson 1986-87)。このことから、ウルク文化に関連する遺跡から出土したタビュラー・スクレイパーも、南レヴァント地方の乾燥地域で専門的に製作され、特定の交易ルートを通じて搬入されていた可能性も考えられる。しかし、調査密度を考えると、シリア内の乾燥地域からもタビュラー・スクレイパーの製作址が今後発見される可能性は否定できない。そのため、本論考では、「搬入」ではなく「導入」という表現にとどめて置きたい。

では、何故、ウルク文化に属する集団は、南レヴァント

地方起源のこのような石器を導入するようになったのだろうか。これまでの研究は、この点を十分に説明していない。既に紹介した一連のローゼンの研究も、南レヴァント地方に視点を絞ったもので、ウルク文化から出土するタビュラー・スクレイパーについてはほとんど考察を行っていない。この論考では、紀元前4千年紀半ばから後半にかけて、元来南レヴァント地方の乾燥地域で製作されていたタビュラー・スクレイパーが、北シリアを中心としてウルク文化と関連する遺跡に導入されたようになった原因と背景について、またウルク文化におけるタビュラー・スクレイパーの役割について考察することを目的とする。

このことを検討するには、この石器が何に用いられたのかを明らかにしておく必要がある。そこで、資料が充実し、この石器の起源地と思われる南レヴァントを中心として、タビュラー・スクレイパーの機能についてまず考察することとする。

タビュラー・スクレイパーの機能についての考察

この石器の機能については、実際に様々な仮説が提出されている。R.アンガー・ハミルトンは、使用痕分析の結果からアシを削り矢柄を作る道具だと推定した(Unger-Hamilton 1988)。同様に使用痕分析を実施したM.マックノーイは、解体用ナイフ、Y.ロワーンとT.E.レビーは、皮革加工及び解体用のナイフであると結論づけた(McConaughy 1979, 1980; Rowan and Levy 1991)。また、土器工房から出土したことから土器製作具とする井の説もある(井 1991)。さらに近年、藤井によって日本にも紹介されたように(藤井 2001)、D.O.ヘンリーが羊毛刈り具説を提出している(Henry 1995)。要するに、この石器の機能については定説がないというのが現状である。これらの仮説の中で、筆者は、ヘンリーの羊毛刈り具説に魅力を感じる。しかしながら、彼の説は、民族誌、石器製作実験、石器の分布、出現期の様相など全般的な考察を行ってはいるものの、英文にして1ページほどの非常に短い所論の中で提示されたものでしかない。特に石器の分布、出現期の様相の考察は、具体的に考古資料を提示、考察することのない概略的なもので終わっている。そこで本論考では、特に石器の分布、出現期の様相を深く掘り下げるこことによって、羊毛刈り具説を検証してみたい。

石器の機能を推定する際、最も有効かつ一般的な方法は石器の使用痕分析である。筆者も、藤井純夫氏の配慮により石器製作址の一つであるカア・アブ・トレイハ西出土のタビュラー・スクレイパーを実見する機会に恵まれた。しかし、この遺跡から出土したタビュラー・スクレイパーは、沙漠特有の強い風と日射によって著しい風化を受けており、使用痕分析は非生産的であると思われた。したがって、

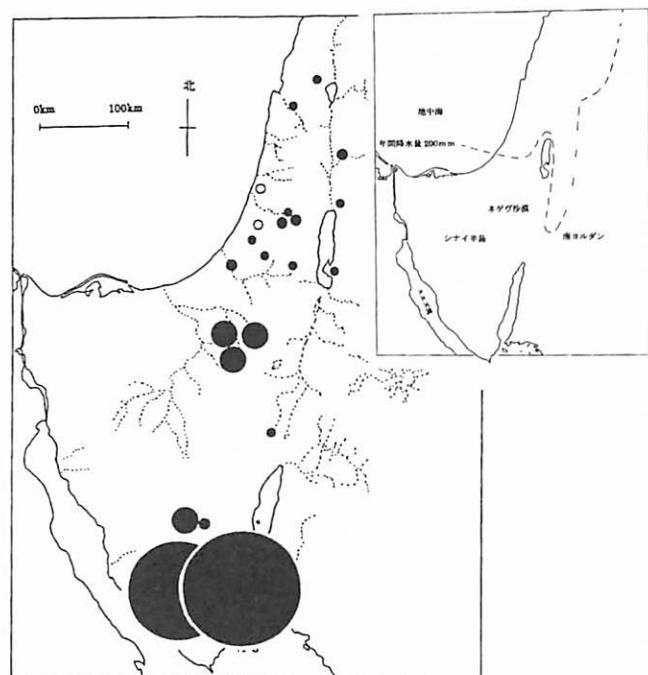


図3 南レヴァント地方前期青銅器時代の22遺跡におけるタビュラー・スクレイパーの割合
(○は、タビュラー・スクレイパーが出土していない遺跡をあらわす。●は、その大きさに比例してタビュラー・スクレイパーの割合が増加することを示す。具体的な数値、参考文献に関しては安倍2000を参照のこと。)

主に石器の分布と出現期の様相から機能を考察することにしたい。特に、どのような背景のもと石器が出現するかを考察することは、石器の機能を推定する上で使用痕分析に並ぶほど有効な方法と思われる。

まず、タビュラー・スクレイパーの分布のあり方をみよう。図3は、南レヴァント地方の前期青銅器時代に属する計22遺跡の報告をもとに、タビュラー・スクレイパーの石器組成に占める割合を図化したものである。既に多くの研究によって指摘されていることだが(Betts 1992; Henry 1995)、明らかにタビュラー・スクレイパーは乾燥地域との結びつきが強い。シナイ半島南部に立地するシェイク・ムヘセン(Sheikh Muhesn)においては、実に石器の90%近くをこの石器が占めている(Beit-Arieh 1986)。さらに、上述したようにタビュラー・スクレイパーの製作址が、南レヴァント地方の乾燥地域にのみ知られていることも、この考えを支持する。石器の分布のあり方からは、都市や農村が栄えた湿潤地域に比べ、伝統的に遊牧活動が営まれてきた乾燥地域から多く出土する傾向にあると指摘できる。

では、この石器の出現期の様相はどうであろうか。ここでは、伝統的に農村や都市が栄えてきた南レヴァント地方の湿潤地域と伝統的に遊牧民が生活してきた乾燥地域を別個に考察していくこととする。なお、本稿では、先土器新

石器時代B期、先土器新石器時代C期、土器新石器時代前半、土器新石器時代後半、銅石器時代、前期青銅器時代という時代区分を用いることとする。また、ヤルムーク文化(Yarmoukian)、イエリコ9層文化(Jericho IX)及びその併行期に属する遺跡を土器新石器時代前半期に、ワジ・ラバ文化(Wadi Rabah)、イエリコ8層文化(Jericho VIII)文化、カティフ文化(Qatifian)及びその併行期に属する遺跡を土器新石器時代後半期に含めることとする。

湿潤地域では、土器新石器時代前半に属するニザニム(Nizzanim)などの数遺跡からタビュラー・スクレイパーの出土が知られている(Yeivin and Olami 1979)。しかし、この時期の出土例は稀で、その作りも雑である。

タビュラー・スクレイパーが主要な器種として南レヴァントの湿潤地域で広範囲に見られるようになるのは、続く土器新石器時代後半以降である。ワジ・ラバ文化に属するナハル・ゼホラ1(Nahal Zehora 1)、テル・ツアフ(Tel Tsaf)、カティフ文化に属するカティフ(Qatif)などからタビュラー・スクレイパーが出土している(Gopher and Orrelle 1989; Epstein 1984; Gopher 1988/89)。以後、銅石器時代、前期青銅器時代を通じてタビュラー・スクレイパーは主要な器種であり続ける。図4は、湿潤地帯に立地する先土器新石器時代B期から前期青銅器時代にかけての計28遺跡の石器報告をもとに作成した図である。定型的で主要な器種である鎌刃、タビュラー・スクレイパー、石鏃の三器種の割合を図示したものである。この図からは、石器組成における根本的な画期が、土器新石器時代後半にあったことが読み取れる。この時期を境に、それまで主要な器種であった石鏃がタビュラー・スクレイパーに入れ替わることがわかる。土器新石器時代後半という時代は、発掘調査も少なく考古学的にあまり注目を受けてこなかった時代であるが、人類史における画期的な事件が生じた時期であると筆者は考えている。この石器組成における根本的な変革も、この事件と深く結びついていると考えられる。

湿潤地域においては、土器新石器時代後半の時期に、羊毛やヤギ毛の利用、バターやチーズといった乳製品の利用が本格的に開始されたと思われる。いわゆるA.シェラートのいう「家畜の二次的利用革命」である(Sherratt 1983)。なぜなら、この時期の遺跡からは、紡錘車や機織用のおもりが多く出土することが知られており、また、乳製品加工用の土器と考えられるチャーンが始めて出現するからである(Orrella and Gopher 2000)。湿潤地域では、ヤギ/ヒツジ飼育は、先土器新石器時代B期後半には開始されていたが、最初期の家畜飼育は、主に肉を目的にしたものであつたのだろう。本格的にチーズやバター、羊毛やヤギ毛が利用されるようになるのは土器新石器時代後半からだと考えられる。続く銅石器時代の遺跡から、チャーンが頻繁に出

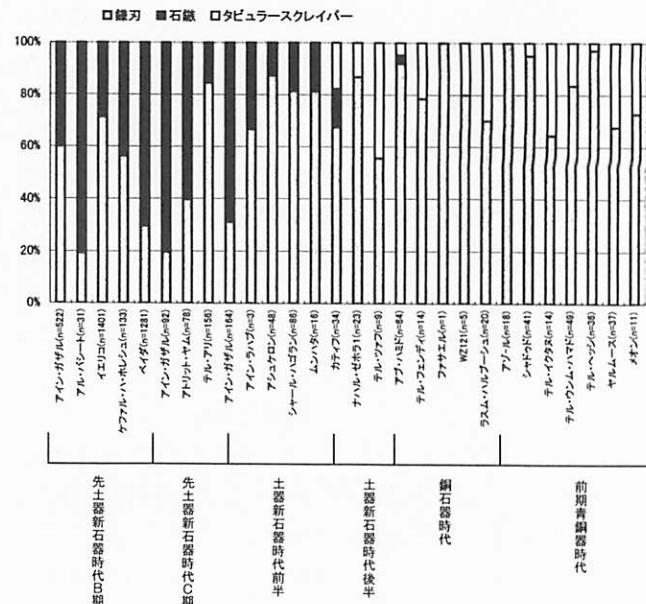


図4 南レヴァント地方湿潤地域における鎌刃、石鏃、タビュラー・スクレイパーの相対比の通時的变化(具体的な数値、参考文献に関しては安倍2000を参照のこと。)

土すること、また西アジア最古の毛織物が出土していることからも、上記の考えは支持されるものと思われる(Bar-Adon 1980)。

湿潤地域におけるタビュラー・スクレイパーの出現期の考察から、この石器が家畜の二次的利用の開始と結びつき、石鏃と入れ替わるように出現したことが推定できた。

次に、遊牧民が伝統的に生活してきた乾燥地域におけるこの石器の出現期の様相を考察する。本稿では、調査例が多いシナイ、ネゲブ、南ヨルダンの乾燥地域を取り扱うこととする。乾燥地域でも、タビュラー・スクレイパーは、土器新石器時代後半から主要な器種となる。この現象と並行して、この時期に乾燥地域の遺構に根本的な変化が生じたことが知られている(Rosen 1988; Goring-Morris 1993; 藤井 2001)。

先土器新石器時代B期のシナイ、ネゲブ、南ヨルダンでは、直径3mから5mほどの複数の小型の円形遺構が隣接して密集する「蜂の巣」状遺構が典型的な遺構として確認されている(図5)。このような遺構は、南ヨルダンのAIN・アブ・ネヘイレ(Ain Abu Nekheileh)、南ネゲブのナハル・イッサロン(Nahal Issaron)のC層、シナイのワディ・トゥベイク(Wadi Tbeik)などで知られている(Kirkbride 1978; Goring-Morris and Gopher 1983; Bar-Yosef 1984)。この種の遺構は、乾燥地域特有のものである。同時期の湿潤地域においては、AIN・ガザル(Ain Ghazal)やエッ・シフィヤ(Es-Sifiya)やバスタ(Basta)など10haを超える巨大な農耕村落が存在していたのに対し、乾燥地

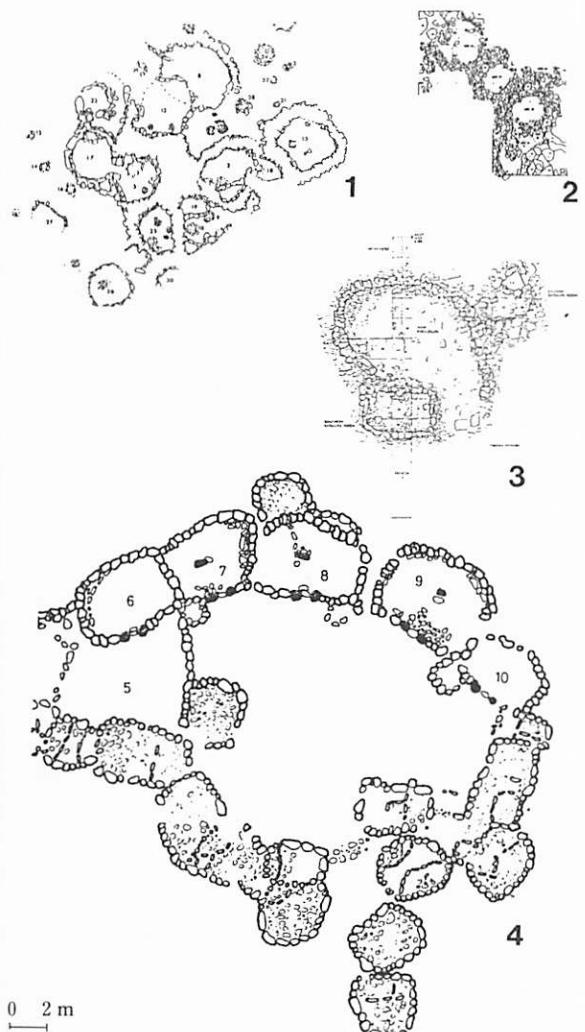


図5 「蜂の巣」状遺構とコートヤード式遺構
1 ナハル・イッサロン（「蜂の巣」状遺構）
(Gopher, Goring-Morris and Gordon 1994) ;
2 アブ・サリーム（「蜂の巣」状遺構）(Gopher
and Goring-Morris 1998) ; 3 ラヒーヤ・シ
ナイ 1 (コートヤード式遺構) (Eddy and Wen
doer 1999) ; 4 ナビ・サラー (コートヤード
式遺構) (Beit-Arieh 1974)

域の遺跡は規模が小さく、0.1 ha を超えるものはほとんどない。また、農耕、牧畜を行っていた証拠も乏しく、石器の面でも石鎌が多く、鎌刃がほとんどみられない。これらのことから、乾燥地域に見られる「蜂の巣」状遺構は、狩猟採集民によって残されたキャンプサイトと考えられる。農耕村落が栄える湿潤地域の外側には、いまだガゼルやアイベックスの狩猟や植物採集で生業を立てる狩猟採集民が暮らしていたようだ。

先土器新石器時代C期、土器新石器時代前半期に属する遺跡も複数知られているが、現段階では、具体的にプランがわかる遺跡が報告されておらず、比較は難しい。

しかし、続く土器新石器時代後半期になると、それまで知られていた「蜂の巣」状遺構に、直径 10 m から 20 m ほどの大型の円形遺構が付随するようになる（図5）。この大型の円形遺構内部から、ヤギ／ヒツジの骨や糞層が出土した例が知られていることから（Avner et al. 1994）、この大型円形遺構は、家畜囲いであると推定されている。このような遺構は、コートヤード式遺構の名で知られ、銅石器時代、前期青銅器時代を通じて乾燥地域で典型的に見ることができる。さらに、同様の遺構は現代の遊牧民の間でも見ることができる。この家畜囲いの登場は、本格的な沙漠への家畜の導入即ち遊牧の登場と関連していると推定されている（Rosen 1988）。この狩猟採集民から遊牧民の変化と並行して、石器組成にも根本的な変化が生じている。

図6は、シナイ、ネゲブ、南ヨルダンの乾燥地域に位置する先土器新石器時代B期から前期青銅器時代にかけての遺跡計13遺跡の石器報告をもとに、通時的な石器組成の変化を示した図である。純粹に家畜囲いの導入によって石器がどう変わるかを検討するため、蜂の巣状遺構或いはコートヤード式遺構が確認され、かつ石器に関して具体的な報告がなされている遺跡のみを扱うこととした。図からは、家畜囲いの登場即ち遊牧の登場とともに、石器組成にも根本的な変化が生じたことが明らかである。タビュラー・スクレイパーが登場し主要な器種になる一方、石鎌が急激に減少していることがわかる。

乾燥地域におけるタビュラー・スクレイパーの出現期の考察からは、この石器が遊牧の登場とともに石鎌と入れ替わるように登場したことが明らかにされた。

以上の分析からすると、伝統的に家畜飼育に重きを置く乾燥地域からこの石器が多く出土すること、この乾燥地域においてのみ石器製作址が確認されていること、この地域への家畜囲いの導入即ち遊牧の登場と時を同じくしてタビュラー・スクレイパーが登場することが言える。これらは、いずれもこの石器が、家畜飼育、ヤギ／ヒツジ飼養に関連した道具であったことを示唆している。

しかし、湿潤地域においては、家畜の登場とタビュラー・スクレイパーの登場には何百年もの開きがあるため、単純に家畜飼育の道具と考えることができない。肉目的の家畜飼育から、羊毛やヤギ毛、乳製品を目的とした家畜飼育に本格的に移行して、はじめてタビュラー・スクレイパーが主要な器種となる。さらに乳製品利用には、特に利器が必要とされることを考え合わせると、タビュラー・スクレイパーは、家畜飼育の中でも特に羊毛やヤギ毛刈りといった作業に用いられたのではないかと推定される。もちろん、状況によっては、土器製作具や弥生時代の石包丁のようにムギの穂刈り具として転用されることがあったかもしれないが、石器の分布、出現期の様相から判断する限り、この石

□石鎚(三日月形石器、台形石器含む) ■石鎚(三日月形石器、台形石器除く)
■タビュラースクレイパー

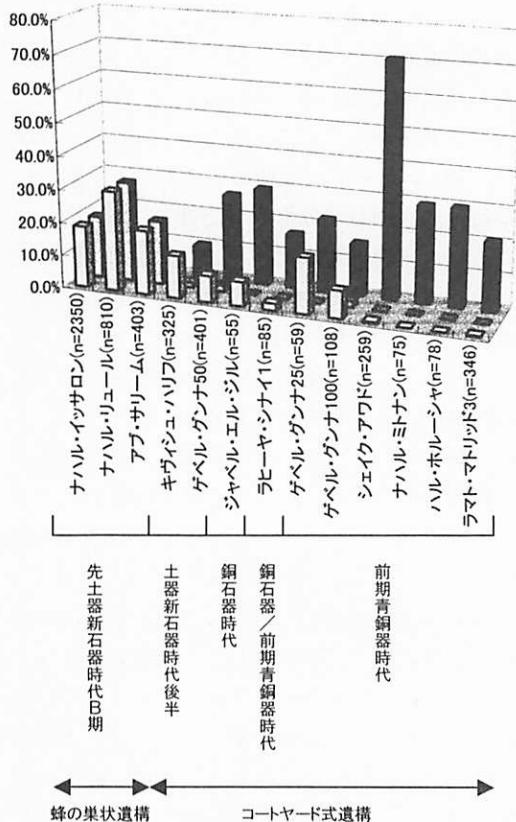


図6 南レヴァント地方乾燥地域における石鎚、タビュラースクレイパーの割合の通常的な変化
(具体的な数値、参考文献に関しては安倍2000を参照のこと。)

器の主要な用途は、家畜用のナイフ特に羊毛／ヤギ毛刈りの道具だったと考えたい。この結果は、ヘンリーの羊毛刈り具説を支持するものである。

ウルク文化の拡大とタビュラースクレイパー

紀元前4千年紀半ばから後半にかけて、周辺地域に拡大するウルク文化が、タビュラースクレイパーを導入するようになったのは、羊毛刈り具としての機能と深く関係していると筆者は考える。

これを裏付けるものとしてエジプトとの関係を挙げることができる。南レヴァント地方は、伝統的に南メソポタミアよりもむしろエジプトとの関係の方が強い地域である。紀元前4千年紀半ばから後半（南レヴァント地方では前期青銅器時代の初頭にあたる）にかけても同じことがいえ、南レヴァントからは、多種多用なエジプト関連の遺物が出土している。にもかかわらず、タビュラースクレイパーに限っては、エジプトからではなく、むしろ南メソポタミアと関連する遺跡から多く出土する傾向がある。現在、エ

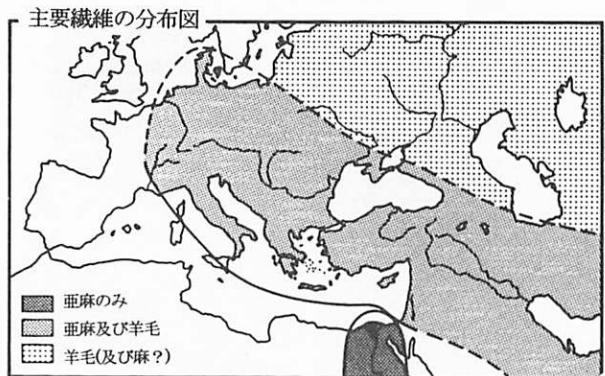


図7 古代における主要纖維の分布図
(Barber 1991を筆者が改変)

ジプトからは、マーディ (Maadi) とブト (Buto) からしかこの石器の報告はない (Rizkana and Seher 1985; Midant-Reynes 2000)。この現象は、タビュラースクレイパーの主要な用途に、羊毛刈りがあったことを考慮するとうまく説明がつく。

エジプトでは、伝統的に羊毛が衣服に使用されることは少なく、亜麻布が使用されることが多かった (Barber 1991)。一方、南メソポタミア、レヴァント地域では、亜麻布とともに伝統的に羊毛製品が日常の衣服として使用されることが多かった。図7は、バーバー (Barber 1991) が、考古資料、文献資料をもとに古代における主要纖維を色分けした図だが、タビュラースクレイパーの出土土地は、まさに羊毛利用圏と一致することがわかる。より交流の深いエジプトに、タビュラースクレイパーがほとんど搬入されなかった理由として、亜麻を主要纖維とするこの地域にとっては、羊毛刈り具としてのタビュラースクレイパーは、必要なかったためだろう。

一方、南メソポタミアでは、様相が一転する。古代の南メソポタミアでは、日常の衣服としてだけでなく、交易品としてもまた羊毛製品の価値が高かった。有名なハンムラビ法典には、南メソポタミアの三大特産物として、油、穀類とともに羊毛製品が挙げられている (Ryder 1993)。紀元前3千年紀、2千年紀の文字資料からは、南メソポタミアで大量の羊毛製品が生産され、盛んに交易品として輸出されていたことが明らかとなっている。この地域は、元来資源に恵まれない土地であり、銅、フリント、黒曜石、木材、貴石などの資源を外部から搬入する必要があった。そのため伝統的に穀類に並んで交換財としての羊毛製品の価値が高かったことが知られている。ウルク期の円筒印章にも、女性が並んで機を織っている姿が描かれていることなどから、アルガゼは、同様のことが紀元前4千年紀後半にもあてはまると考えている (Algaze 1993)。さらに、I. J. ゲルブは、北シリアのエブラ (Ebla) と南メソポタミアのラガ

シュ (Lagash) から出土した文書をもとに興味深い比較を行っている (Gelb 1986)。彼は、北シリアは、南メソポタミアと比較した場合、農地は小さく、農業生産力は必ずしも高くなかったが、一方では牧草地に恵まれ、多くのヒツジが飼われ、織物生産が特に輸出品として重要であったことを指摘している。さらに R. ライトは、産業としての穀類、及び羊毛製品の需要が高まった結果、南メソポタミア内で、穀類生産と家畜飼育が競合するようになり、その危機を乗り越えるためウルク文化が家畜飼育に向いた土地に進出していった可能性もあると示唆している (Wright 1989)。タビュラー・スクレイパーが頻繁に出土する北シリアは、まさに、南メソポタミア起源のウルク文化にとって重要な羊毛生産地であったことがわかる。

南メソポタミアでは周辺地域に先立ち早く都市化を迎える。複雑化する社会、経済を支えるため資源を絶えず導入する必要がある一方で、交換財としての羊毛製品の需要も急激に高まったものと思われる。羊毛を求め、羊毛生産に向いた土地に政治的な領域を広げる一方、羊毛生産の組織化は急務であり、神殿や宮殿によって羊毛製品生産は統制されるようになったと想定される。羊毛製品生産の組織化の中には、家畜種の改良、機織技術の改良、羊毛採取の効率化なども含まれていたものと思われる。このような背景のもと、南レヴァント産のタビュラースクレイパーは、うつつけの効率の良い羊毛刈り具としてウルク文化の物質文化に導入されたと推測できよう。

おわりに

最後にタビュラー・スクレイパーの製作者であった先史遊牧民について触れておきたい。タビュラー・スクレイパーの製作址は、現在、南レヴァント地方の乾燥地域内にしか知られていない。この地は、現在、ペドウィンと呼ばれる遊牧民が生活を送る舞台となっており、この石器も、恐らくは先史遊牧民によって製作されたのものと示唆される。ウルク文化に主体的にこの石器を導入させたのも先史遊牧民であっただろう。

さらに乾燥地域には、タビュラー・スクレイパー以外にも、ヒツジやヤギや羊毛、乳製品、塩湖で取れる塩など、沙漠固有の特産品をいくつも挙げることができる。それらも遊牧民からウルク文化の諸遺跡に盛んに搬出されていたと考えるのが自然だろう。このような遊牧民が提供する資源が、ウルクの都市文化を維持するためには、不可欠なものであったと考えられる。

近年、南レヴァント地方の沙漠内の遺跡の増減に、遊牧民と都市/農村部との関係が深く影響を与えていたという論文も発表されている (Finkelstein 1995)。ウルク文化を担った南メソポタミアの都市民、農耕民の研究にも、遊牧民

の動向に対する視座が必要不可欠であると筆者は考える。遊牧民、都市民、農耕民の研究は、三位一体で進められるべきものであり、現在はまだ沙漠の調査が始まったばかりである。今後の調査が提出するデータに注目したい。

本稿は、2001年6月に開催された第6回日本西アジア考古学会総会・研究発表会での発表内容をまとめ直したものである。金沢大学の藤井純夫氏には、カア・アブ・トレイハ西出土の石器資料の実見の許可を頂き、東京大学の西秋良宏氏には、幾度に渡り貴重なコメントを頂いた。また、査読者の方々からは、本稿に関して重要なアドバイスを頂いた。記して感謝を述べたい。

参考文献

- Algaze, G. 1989 The Uruk Expansion. *Current Anthropology* 30: 571–608.
- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System*. Chicago, University of Chicago Press.
- Alizadeh, A. 1996 *Choga Mish vol.1: The First Five Seasons of Excavations 1961–1971*. Chicago, The Oriental Institute of Chicago Press.
- Avner, U., Carmi, I. and D. Segal 1994 Neolithic to Bronze Age Settlement of the Negev and Sinai in Light of Radiocarbon Dating: a View from the Southern Negev. In O. Bar-Yosef and R.S. Kra (eds.), *Late Quaternary Chronology and Paleo Climates of the Eastern Mediterranean*, 265–300. Arizona, Radiocarbon.
- Baird, D. 2001 The Analysis of Chipped Stone. In B. MacDonald, R. Adams and P. Bienkowski (eds.), *The Archaeology of Jordan*, 639–658. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Bar-Adon, P. 1980 *The Cave of the Treasure. The Finds from the Caves in the Nahar Mishmar*. Jerusalem, Israel Exploitation Society.
- Barber, E.J.W. 1991 *Prehistoric Textiles*. Chichester, Princeton University Press.
- Bar-Yosef, O. 1984 Seasonality among Hunter-Gatherers in Southern Sinai. In J. Clutton-Brock and C. Grigson (eds.), *Animals and Archaeology: 3. Early Herders and Their Flocks*, 145–159. BAR International Series 202. Oxford, Archaeopress.
- Beit-Arieh, I. 1974 An Early Bronze Age II Site at Nabi Salah in Southern Sinai. *Tel Aviv* 1–4: 144–156.
- Beit-Arieh, I. 1986 Two Cultures in Southern Sinai in the Third Millennium B.C. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 263: 27–54.
- Betts, A.V.G. 1992 *Excavations at Tell Um Hammad*. Edinburgh, Edinburgh University Press.
- Cauvin, J. and D. Stordeur 1985 Une Occupation d'époque Uruk en Palmyrene. *Cahiers de l'Euphrate* 4: 191–205.
- Crowfoot-Payne, J. 1960 Flint Implements From Tell Al-Judaidh. In R. Braidwood and L. Braidwood (eds.), *Excavations in the Plain of Antioch* 1, 525–538. Chicago, University of Chicago Oriental Institute Publication.
- Edens, C. 1999 The Chipped Stone Industry at Hacinebi: Technological Styles and Social Identity. *Paléorient* 25–1: 23–33.
- Eddy, F.W. and F. Wendorf 1999 *An Archaeological Investigation of the Central Sinai, Egypt*. Colorado, University Press of Colorado.

- Epstein, C. 1984 A Pottery Neolithic Site near Tel Qatif. *Israel Exploration Journal* 34-4: 209-219.
- Finkelstein, I. 1995 *Living on the Fringe: The Archaeology and History of the Negev, Sinai and Neighbouring Regions in the Bronze and Iron Ages*. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Gelb, I.J. 1986 Ebla and Lagash: Environmental Contrast. In H. Weiss (ed.), *The Origins of Cities in Dry-Farming Syria and Mesopotamia in the Third Millennium B.C.* Connecticut, Four Quarters Publishing Co.
- Gopher, A. 1988/89 The Flint Industry from Tel Tsaf. *Tel Aviv* 15/16 (1): 37-46.
- Gopher, A. and N. Goring-Morris 1998 Abu Salem: A Pre-Pottery Neolithic B Camp in the Central Negev Highlands, Israel. *Bulletin of the American Schools Oriental Research* 312: 1-20.
- Gopher, A., Goring-Morris, A.N. and D. Gordon 1994 Nahal Issaron. The Lithics of the Late PPNB Occupation. In H.G. Gebel and S. K. Kozlowski (eds.), *Neolithic Chipped Stone Industries of the Fertile Crescent: Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment* 1. Berlin, ex orient.
- Gopher, A. and E. Orrelle 1989 The Flint Industry of Nahal Zehora 1: A Wadi Raba Site in the Menashe Hills. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 276: 67-76.
- Goring-Morris, A.N. 1993 Negev: The Prehistoric Periods. In E. Stern (ed.), *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land*, 1119-1123. Jerusalem, The Israel Exploration Society & Carta.
- Goring-Morris, A.N. and A. Gopher 1983 Nahal Issaron: A Neolithic Settlement in the Southern Negev. *Israel Exploration Journal* 33: 149-162.
- Hanbury-Tenison, J. 1983 The 1982 Flaked Stone Assemblage at Jebel Aruda, Syria. *Akkadica* 33: 34-62.
- Henry, D.O. 1995 *Prehistoric Cultural Ecology and Evolution*. New York, Plenum Press.
- Hole, F. and G.A. Johnson 1986/87 Umm Qseir on the Khabur: Preliminary Report on the 1986 Excavation. *Annales Archéologiques Arbes Syriennes* 36/37: 172-220.
- Kirkbride, D. 1978 The Neolithic in Wadi Rum: Ain Abu Nekheileh. In R. Moorey and P. Parr (eds.), *Archaeology in the Levant*, 1 -10. Warminster, Aris and Phillips.
- McConaughy, M. 1979 *Formal and Functional Analysis of Chipped Stone Tools from Bab edh Dhra*. Ann Arbor, University Microfilms.
- McConaughy, M. 1980 Chipped Stone Tools in Preliminary Report of the 1979 Expedition to the Dead Sea Plain, Jordan. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 240: 21-62.
- Midant-Reynes, B. 2000 *The Prehistory of Egypt*. Oxford, Blackwell Publishers.
- Nishiaki, Y. 1991 Chipped Stone Artifacts. In T. Matutani (ed.), *Tell KashKashok: The Excavations at Tell No.2*, 40-58. Tokyo, The Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.
- Orrelle, E. and A. Gopher 2000 The Pottery Neolithic Period: Questions about Pottery Decoration, Symbolism, and Meaning. In I. Kuijt (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organization, Identity, and Differentiation*, 295-310. New York, Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Quintero, L. and P. Wilke 1998 Jafr Basin Archaeological Project. *Neo-Lithics* 98-1: 4-5.
- Rizkana, I. and J. Seher 1985 The Chipped Stones at Maadi: Preliminary Reassessment of a Predynastic Industry and its Long-Distance Relations. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 41: 235-255.
- Rosen, S. A. 1983 Tabular Scraper Trade: A Model of Material Cultural Dispersion. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 249: 79-86.
- Rosen, S.A. 1988 Notes on the Origins of Pastoral Nomadism: A Case Study from the Negev and Sinai. *Current Anthropology* 29: 498-506.
- Rosen, S.A. 1997 *Lithics after the Stone Age*. Walnut Creek, AltaMira Press.
- Rowan, Y. and T.E. Levy 1991 Use Wear Analysis of a Chalcolithic Scraper Assemblage from Shiqmim. *Journal of the Israel Prehistoric Society* 24: 112-134.
- Ryder, M.L. 1993 Sheep and Goat Husbandry with Particular Reference to Textile Fibre and Milk Production. *Bulletin on Sumerian Agriculture* 7: 9-32.
- Schmidt, F.K. 1984 Zur Frage der ökonomischen Grundlagen frühbronzezeitlicher Siedlungen im Sudsinai Herstellung und Verhandlung von Plattensilexabschlägeraten. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 40: 261-264.
- Sherrat, A. 1983 The Secondary Exploitation of Animals in the Old World. *World Archaeology* 15-1: 90-104.
- Stein, G.J. 1999 *Rethinking World-Systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia*. Tucson, The University of Arizona Press.
- Unger-Hamilton, R. 1991 Microwear Analysis of Scrapers and Sickle Blades. In A.V.G. Betts (ed.), *Excavations at Jawa 1972-1986*, 149-153. Edinburgh, Univ. of Edinburgh Press.
- Wright, R. 1989 Comments on the Article by G. Algaze. *Current Anthropology* 30-5: 599-600.
- Yeivin, E. and Y. Olami 1979 Nizzanim. *Tel Aviv* 6: 99-135.
- 安倍雅史 2000 「西アジア、タビュラースクレイパーの展開と先史遊牧民」東京大学大学院人文社会系研究科修士論文。
- 井 博幸 1991 「メソポタミアにおける製陶具」『ラーフィダーン』12: 1-56。
- 藤井純夫 1998 「ヨルダン南部沙漠地帯における石器製作址: カア・アブ・トレイハ」古代オリエント博物館/西アジア考古学会編『古代オリエントを掘る: 第5回西アジア発掘調査報告会』28-34。
- 藤井純夫 1999 「肥沃な三日月弧の外側: カア・アブ・トレイハ西遺跡の第二次発掘調査」日本西アジア考古学会編『古代オリエントを堀る: 第6回西アジア発掘調査報告会』25-32。
- 藤井純夫 2000 「肥沃な三日月弧の外側: カア・アブ・トレイハ西遺跡の第三次発掘調査」日本西アジア考古学会編『古代オリエント世界を堀る: 第7回西アジア発掘調査報告会』43-59。
- 藤井純夫 2001 「ムギとヒツジの考古学」世界の考古学 16 同成社。

安倍雅史
東京大学大学院生
Masashi ABE
University of Tokyo